

「あなたがしたことを、許すわ」

うまく、笑えたかしら。

声は震えていなかった？

震える指先を、自分の手でそっと押さえた。

ツバメはそらしていた視線を、ゆっくりと私へ戻す。

^{こはく}琥珀色の瞳が、揺れている。

「ルル……」

困ったように、こらえるように、眉を寄せて笑うルル。

その表情が、胸に刺さった。

名前を呼ぶだけで精一杯だった。

これ以上、言葉をかけることは許されない気がして――。

「本当、ばかみたいよね。^{だま}騙されていても、盗まれても……」

一瞬、言葉に詰まる。

それでも、これはきっと伝えないといけない思いだから。

ツバメをまっすぐに見つめた。

「私、まだ――あなたのこと、嫌いになれないの」

重ねられた^{ゆる}赦しの言葉。

その声は優しくて。

その唇は震えていて。

こんな言葉をルルからもらう資格なんて、俺にはなかったのに。

足が自然と彼女のもとへ向かおうとして、一歩、動かした瞬間――。



「行って！」

俺の動きを制止するかのように、彼女は言い放った。

「行って。早く、その万能薬で元気にしてあげて」

彼女が言っているのは、母のことだとすぐにわかった。

俺を選んだのは、ルルじゃない。

俺は、母を選んだ。

そうはっきりと、ルル自身の言葉で突きつけられる。

「……うん、わかった」

こちらへ向けられた足を引き返し、ツバメは玄関へ向かって歩いていく。

きい、と扉を開ける音が聞こえても、私はその場から動くことができなかった。

吹きつける冬の風が、窓をたたく。

それだけが、耳の奥で響いていた。